



# 『仏陀の智慧を経営に生かす』

高井法博会計事務所 創立三十周年記念事業  
仏陀ゴールドロードセミナーを主催して  
税理士法人TACT高井法博会計事務所  
TACTグループ関連十二社代表  
税理士 高井 法博

昨年は高井法博会計事務所創立三十周年の年に当り、これを記念し年初より書籍の出版を始め、いくつかの記念事業を実施してきた。その中の一つとして、この『仏陀の智慧を経営に生かす』仏陀ゴールドロードセミナー』を企画し、昨年十一月、実施させていただくことができた。

「何故この企画なのか」と多くの方から質問を受けた。その理由はいくつもある。今までも毎年国内、国外の研修旅行を主催してきたが、そのいずれも単なる研修や観光の旅行に終わることなく、その時代の流れに合わせ、企業としてどう対応すべきかを模索しそのヒントを見つけ出すためである。また、いつも悩み苦しんでいる経営者の一人として、人間として次々とぶち当たっている問題にどう考え、どう誤りなき正しい判断をするかをテーマに、また通常の研修旅行では考えられない程の勉強会を行う。行く前から予備セミナーを開催し、また結団式では挨拶もほどほどに一時間程のレクチャー。行く先々の車中で、訪問見学先で、ホテルで数多くの講義を行う。一つ一つに目的、目標を定め、十分に準備を

高井法博会計事務所創立三十周年に当た

く上でグローバル化した現在、「BRICs」の一員として中国に次いで目覚ましい経済発展を続けているインドを訪れ、今後の国際化した経済の中で自社をどう対応させて行くかを考える旅にもしたい、と思い企画した。

二、仏陀ゴールドロードセミナー  
今までの研修旅行は、ほとんど私が調べ解説しながら実施してきたが、今回のテーマはとても私向きでは対応できない。二十一年前にご同行・ご指導いただいた日本におけるこの道の第一人者である松村寧雄先生に講師をお願いした。

仏陀が出家し、ガンジス河を渡った地『パトナ』から仏陀の精舎第一号、竹林精舎の地ラジギール、仏陀が般若心経や法華経を説法した靈鷲山でご来光を仰ぎながら般若心経を唱和、ラジギールのナールンダ仏教大学遺跡見学。仏陀が六年間苦行を続けたウルベーラの前正覚山。悟りを開いたブダガヤの菩提樹の下で座禅を組み、またガヤ駅の雑踏の中でスニーカーを磨かせると言う子供の靴磨き屋。子供の乞食、またファミリーの乞食の洗礼、初めて説法をした地（初転法輪）サールナート、ガンジス河にてご来光を仰ぎ沐浴、ムガルル皇帝が妃のために建てた世界遺産タージ・マハール。この行程の中で、移動の車中で、遺跡に腰をかけ、原っぱに座り、時にはホテルの会議室でその時々において、仏陀の生涯から悟りを開き80歳で入滅するまでの足跡を追いながら松村先生に八回に渡って名講義をしていただいた。

三、仏陀の智慧を経営に生かす  
経営や、人生の師でもある竹内日祥上人は当然とし、後藤勝卵場の創業者後藤静一氏、京セラの創業者稲盛和夫氏、TKC創業者飯塚毅先生、その他多くの素晴らしいお客様、経営の師、恩人からは、計数に基づく論理的・科学的な経営手法と共に、『自利利他』の精神、心を磨き魂を高めるための修行『六波羅蜜』『八正道』の実践等や、さらには仏陀が説く世の中はすべて「相互依存」の関係で「空」の認識を悟る必要性や、『生き方』『考え方』を磨く重要性を教えていただいている。まさにこれは車の両輪で、成功する経営者はこの双方の勉強を欠かさない。今回の旅行の目的の一つに、松村先生からこういった仏教の解説をしていただこうということがあった。そして二十一年前先生と知り合った時、先生が曼陀羅からヒントを得て開発されたMY法マンダラチャートの活用方法を教わった。以後勝手にTACT法と命名し、私はカバンの中に常に数枚入れて、色々な計画を練る時や問題解決の際、このチャートを取り出し大いに活用させていただいている。開発者の松村先生からこのMY法(TACT法)の活用方法のセミナーを、今後改めてお客様向けに数回にわたりじっくりとしていただきたいと思います。

四、インドのシリコンバレー バンガロール  
今回の旅行のもう一つの目的は、BRICsの一員として、かつての自給自足政策から、解放経済、自由化政策に転換し、全世界から人と資本を導入し経済成長率8%

いと思っていた。また、企業経営をしてい

台へと大きく躍進しつつあるインドを見ることにあった。

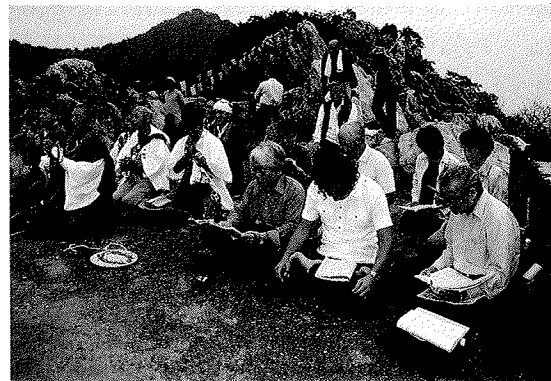
インドのシリコンバレーと言われるバンガロールを訪問し、その内でも有数のソフトウェア会社インフォシスを訪問した。今から二十一年前、たった七人で始めた企業が今では四万人を超え、一九九三年にインドで上場、一九九九年にはアメリカナスダックに上場、株式時価総額で日本のソフトバンクを上回るような企業に成長している。バンガロールのオフィスは、まさに大学のキャンパスのようで、東京ドーム二十二個分という広大な敷地内に四十一棟ものビルが建ち並び、オフィスはもとより二十四時間利用できるレストラン、ショッピングセンター、病院、宿泊施設までが完備され、屋外にはゴルフコースやプールであり、求人倍率百倍という企業で、今までインド国内を旅行してきてその落差に唖然とした。日本の格差社会など取るに足らないと感じた。

また、現地在住のJETROと三菱東京UFJ銀行の両支店長からインドの現状、日本企業の進出状況、インドでのビジネス、また取引をする上での注意点などのレクチャーを受けた。お二人の意見は立場・考え方の違いから微妙な差があり、一面からだけの意見ではなく正しい判断をする上で色々な意見を聞くことの重要性も再認識した。

### 五 インドをもっと知ろう

インドは今世界中から注目されている。目覚ましい経済発展、そして爆発的な人口増加は数年で中国を抜くという。相変わらず

ず続く異教徒間の争い、根強く残るカースト制度、原始的な生活から原子爆弾までの多彩な国。世界に誇るコンピュータ、ソフト技術の開発があれば、一方で三千年前のやり方をそのまま受け継いでいる農村。場所によっては電気や水道、また家にトイレすらなく裸同然の生活で、義務教育制度はあっても学校がない地域、最上級の生活をする者から路上生活をする者や、父祖伝来の乞食もいる。町に牛が放し飼いにされ牛糞が舞う街中。ゴミは処理されるのではなく、道路脇に山積みされそのゴミの山から何か食料か金目のものを捜すために引っかき廻している者、とにかく汚く、臭く、異臭を放ち、旅行参加者のほとんどが洗礼を受ける下痢、反面欧米のどこにもひけをとらないバンガロールのような先端企業の集積するキャンパス。一つの国で



これだけ多くの異なる文化、風習、そして景観、遺跡、気候、生活レベルの違う多様な国は珍しい。日本とインドは遠い国である。距離も地球の片面を斜めに縦断するくらいある。昔は、天竺といふ宇宙の果てのような存在であった。しかし、第二次世界大戦中から戦後の貿易、敗戦時東京国際裁判でのインドのパール判事がただ一人日本無罪論を主張した態度、戦後ネール首相が

日本の子供達に贈ってくれた象「インディラ」、そして最近の交流など遠くで近い国になりつつある。これからのアジアの中で中国に次ぐ目玉はインドであり、日本経済新聞等の記事を見ていても、インドの記事が出ていない日はほとんどない。

我々二十一世紀の企業経営を誤りなく行っていく上でも、また日本のためにもインドをより多く知る必要がある。今回の旅行のためにたくさん新聞記事も切り抜き、また本屋にも足を運び何十冊もの本も読んだ。色々な分野の幅広い出版物があるが、ほとんどが部分的、専門分野は知ることとはできるが、マクロのインドは焦点が大きすぎて絞りにくいためかほとんど見当たらない。機会があれば何度か訪れ徐々に知っていく以外にないのではないかと思つた。そこにインドの魅力がある。世界の人々が、好奇心と探求心を抱くのは当然であろう。しかし、世界で

最も大規模な農耕民族の集まる国、民主主義国家のインドも今、急速に近代国家に変わって来ている。最も大規模な農耕民族の集まる国、民主主義国家のインドも今、急速に近代国家に変わって来ている。最も大規模な農耕民族の集まる国、民主主義国家のインドも今、急速に近代国家に変わって来ている。

### 六 亡き両親への想い

個人的なことであるが、一昨年十二月、長い闘病生活の末に母親を亡くした。今回その母親の遺骨をもって旅をした。毎日左胸のポケットに入れ心の中で話しながら旅を続けて、聖なる河、ガンジス河で皆さん

が般若心経をあげていただく中、流してやる事ができた。実は二十一年前にこのインド旅行に参加した時も、その前年に亡くなっていった父の遺骨を持って来て同じように流させていただいた。生前苦勞と心配ばかりさせて、何もしてやる事ができなかった。喜び合っているのではないかと思つている。皆様のおかげで何よりの供養ができた。本当にありがたく心から感謝申し上げます。

最後に、九日間にもわたるこの研修旅行に私の無理なお願いをお聞きいただき、ご同行・献身的なご指導賜りました松村寧雄先生・松村剛志先生に心から御礼申し上げます。先生、終始適切な対応・お世話をしていただき、何と二日目には、日本の自殺者三万五千人、イジメの問題等日本の実状を日本人以上に数字を挙げて話し、「日本はどうなっているのか? おかしい方向に向かっているのではないか? 終戦時の日本は良い風習、正しい考え方、両親への感謝、良い教育があり、利他行の精神があり、敗戦後の大変な時期を見事に立ち直り、近代国家日本を作り、インドはそれを見本にしてきた。今日の日本を作っているのは、日本の親や、企業にも責任がある」と叱咤激励をしてくれたガイドのパタックさん。

何よりもこの企画にご参加いただき三十二年事業を盛り上げてくださいました社長、ご夫婦を始めご参加いただきました皆様方に心から感謝し、主催者として御礼の挨拶とさせていただきます。